

序文

これはファンタジーではありません。現実に第一次大戦で戦死した死後間もない弟のレックス中尉に、ワード氏がトランス状態で会いに行き、そこで実際に話したり聞いた話話を、そのまま記録したというものです。

原著者のJ・S・M・ワード（ジョン・セバスチャン・マローウ・ワード、1885～1949）は、イギリスのケンブリッジ大学トリニティ・ホールを、トップレベルの成績で卒業して講師まで務めたという、歴史・経済学の専門家（王立経済学会・王立統計学会フェロー）です。おまけに実家は英国国教会の司祭の家系で、社会的な地位や名誉もある人でした。それがある意味なげうって、“Gone West”（『死後の世界』）と、その続編にあたる本書“A Subaltern in Spirit Land”（『幽界行脚』）を出版、センセーションを巻き起こします。本人は、

お金を稼ぐためなら、南米の英国貿易の進展策とか何とかいうものをちよつと書けば、貿易雑誌も商業雑誌も喜んで掲載するのであつて、頭がおかしくなつたといわれるのは心外だとこぼしたりしています。

このあたりは、本書を最初に日本に紹介した原訳者の浅野和三郎氏とも似ています。浅野和三郎（1874～1937）もまた、東京帝国大学の英文学科で小泉八雲に学び、海軍機関学校の教師（後任は芥川龍之介）にまでなつた著名な英文学者であつたのを捨てて、この靈魂研究の道に入つていったからです。そこまでして、本書を刊行したのはなぜか？ きつと、この本を読み終わつた時に、みなさまにも分かつていただけれるものと信じます。

ワード氏はもともと歴史学上の意味から古の知恵を継ぐ秘密結社いにしえに関心があつたものの、自分に靈的な能力があるなど思つておらず、叔父にあたるH・J・ランチェスター氏が死後あの世から通信を送つてこようとしたときに、靈能のありそうなワード氏をみつけ、自動書記で通信を送つてきたという経

緯があります（詳しくは『ワードの「死後の世界」』にあります）。しかし、最終的にはトランス状態で肉体から抜け出て、まるで服を着替えるように、人間がもともと持っている見えない体（エーテル体や幽体）を使い分けて、異世界のいろんな階層に出現できるようになります。さらには、地上の肉体に戻ってもその全ての世界での出来事を記憶しているという離れ技の能力を発揮するに至っては、スピリチュアリズムの研究史上、類をみない能力者です。

現代でいうならさながら、「異世界ジャンパー」といったかんじでしょうか。

私たちが旅行をするとき、専門家の本よりも、SNSなどで一般人が撮った写真や口コミを見て、目的の場所を決めることはないでしょうか。

この「幽界行脚」は、身近な人たちの死んだあとの状況を伝えてくれるものです。つまり、イエスさまやお釈迦しゃかさまのような聖人、神々や天使や、ま

た大師といわれる方々（例えば『シルバー・バーチ霊言集』、『ホワイト・イーグル霊言集』、『ステイントン・モーゼスの『霊訓』、アラン・カードックの『霊の書』など）の深遠な普遍的教えではないかもしれませんが。しかし、私たちにとっては、よりリアルに他界の実像に触れていくことができる価値あるものです。特に冥府めいふとも呼ばれるエーテル界についての、ここまで詳しいスピリチュアリズムの文献は他に知りません。

私たちはどんな奇跡が起こっても、将来あの世に旅立たない人はいません。そうすると、本書は、未来への旅に期待を膨らませ、万全の準備をすることができるといって、プライスレスの地図やガイドブックと同じです。そして、昨今のアニメでも「異世界」のジャンルが流行しましたが、異世界もののリアルであり古典（妖精や魔法の物語の起源）というのも、この本のプライスレスなところではないでしょうか。

原著は、日誌形式で緻密なチャプター68章に及ぶ膨大な記録（浅野訳でも55章）です。

今回は、現代の若い人たちにも読んでもらいたいと、興味深いエピソードを27話に厳選し、さらに今はあまり使われなくなった日本語も、元の英文を確認しながら現代文表現に訳し変えていきました。

とはいえ、「新潮」の前身である「新聲」の主筆でもあった偉大な英文学者、浅野和二郎の名文の格調は極力かえないよう心がけ、もちろん内容自体は全く変更していません。

ながながと紹介しました、それでは、異世界旅行のはじまりです。

(編注) 原訳からの主な変更点とおことわり

※文中、原訳者、浅野和二郎・粕川章子両氏が原文通りに翻訳されていた「the astral plane ≡ 幽界」「astral body ≡ 幽体」の箇所を、今回の編集でそれぞれ「エーテル界」「エーテル体」に書き変えました。

書名は原訳者を尊重し『幽界行脚』のままにしています。

(変更点の考察については、【コラム3】エーテル界の地図(182ページ)を参照)

※文中、注釈(成内)は、基本的に(※)で入れています。

※文中、今日の人権感覚では不適切な表現(戦いの描写や敵国への発言など)があります
が、原著訳者に差別や暴力肯定の意図はなく、執筆当時の歴史的背景と資料的価値に
鑑みて基本的に原訳のままにしています。また、現在は使われなくなった語句(看護
婦など)についても同様に原文のままにしている箇所があります。どうぞご了承ください。
さい。